

# 日本英語学会第33回大会発表要旨

## 〈研究発表〉

第一室 (11月21日午後)

司会 金澤俊吾 (高知県立大学)

### 「『数詞＋名詞＋and＋名詞』の文法」

小早川暁 (獨協大学)

表題の表現における数詞は「名詞＋and＋名詞」を作用域とし、それぞれの名詞が指すものの合計を表しうる。例えば、I have five brothers and sisters.であれば、兄弟が5人いること(6人兄弟であること)を表す。ここでは、男女の内訳は明示されていない(cf.[1])。そこで、本発表ではまず、five brothers and sistersに認めうる男女の組み合わせのパターンに関して母語話者が2タイプに分かれることを明らかにし、その事実に対して説明を与える。次に、この表現に現れる名詞の特徴について考察する。上記の例の他、five {boys and girls/aunts and uncles}などがこの表現の典型例である。five {cats and dogs/pens and pencils}なども可能だが、使われる文脈に限られており、??five {pumpkins and watermelons/raspberries and blueberries}などは容認しにくいようである。こういった容認度の差について、フレームやカテゴリー化といった観点から説明を試みる。

[1] Jespersen, Otto (1924) *The Philosophy of Grammar*, University of Chicago Press, Chicago.

### 「英語における形容詞の意味変化の双方向性をめぐって」

岩橋一樹(摂南大学(非常勤))

英語における形容詞の意味変化に関しては、heavy heart や angry wind といった語句の使用が示すように、感覚から感情へ、感情から感覚へという双方向性がみられる。本発表では、Lakoff and Johnson (1980[1])や Lakoff (1987[2])、Grady (2005[3])のように、意味拡張が身体性や一方向性に基づいていると主張することに問題があることを示し、意味変化の双方向性を統一的に説明できる代案を提示する。特に、

本発表では感覚形容詞や感情形容詞の元の意味と拡張された意味との間で共有される程度や評価に関する一般性の高い中核的意味に基づいてこれらの形容詞の意味が拡張すると主張する。このような主張に基づき、目標領域で感情以外の性質の評価や程度が感情形容詞によって述べられることや、目標領域で感覚以外の性質の評価や程度が感覚形容詞によって述べられることを意味間の共通性や一般性の観点から説明する。

[1] *Metaphors We Live By* [2] *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind* [3] "Image Schemas and Perception: Refining a Definition"

### 「なぜ動詞forgiveは二重目的語構文に生じることができるのか」

辻早代加 (大阪市立大学大学院)

典型的な二重目的語構文では、I gave him money. にみられるように、直接目的語で表されるものが、間接目的語で表される相手に移譲されている。一方、I forgave them their sin./ I forgave him his debt. などの二重目的語表現においては、罪/借金が相手に与えられているわけではない。むしろ最初から相手のもとにあるものである。そのため、forgiveはこの構文に用いられる動詞としては一見例外的に思われる。

しかし、決して単なる例外というわけではない。本発表においては、他の多くの二重目的語表現と同じようにforgiveにおいても、virtual benefitと呼べるものが相手に与えられていることを示し、forgiveが二重目的語構文の意味と十分に整合することを明らかにする。

[1] Goldberg, A. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, U of Chicago P. [2] 岩田彩志 (2012) 『英語の仕組みと文法のからくり—語彙・構文アプローチ—』 開拓社

第二室 (11月21日午後)

司会 花崎美紀 (信州大学)

### 「インタビュー・ナラティブにおける不均衡の是正」

秦かおり (大阪大学)

本発表では、3者間インタビューの参与枠組み (Goffman (1981[1])) を土台とし、「語り手」「聞き手」を相互行為的に果たす参与者達が、自らの「立ち位置」(Bamberg (1997[2])) とアイデンティティをどのようにして相関的且つ協働的に生起させるかを分析する。通常3者間インタビューでは、参与者はそれぞれインタビュアー／インタビュイーとしての役割を果たそうとするために、その関係は「インタビューの主導者」と「それに従って語りを提供するもの」という不均衡性を持つ。しかし、そのナラティブを詳察すると、実際にはよりダイナミックに、その場に実在しない者をも巻き込んで、参与者同士の対立を避ける様子が観察された。本発表では、1) 参与枠組みの不均衡には多層性があること、2) その多層性は様々な二項対立を (主として参与者以外に対立軸を設定して) 多用することにより達成されること、3) それは語用を含んだマルチモーダルな要素により達成されることを論じる。

[1] *Forms of Talk*, U. of Pennsylvania Press. [2] “Positioning between Structure and Performance,” *Journal of Narrative and Life History* 7, 335–42.

### 「日英対照によるマルチモーダル空間談話分析の試み」

片岡邦好 (愛知大学)

「マルチモーダル分析」とは、複数の伝達様式 (ことば、身体、事物、環境など) を統合的に観察し、各要素および参与者間の相互作用を分析の射程に収めようとするアプローチを指す (Streck, Goodwin & LeBaron 2011 [1])。本発表の目的は、言語間対照のために収録された「Mister O コーパス」を用い、日英語での「語り」に出現した空間描写の量的／質的なマルチモーダル分析を通じて、日英語の異同を考察することにある。本分析では、語り中の「崖を飛び越える」描写に焦点を絞り、従来の空間語彙研究 (大堀ほか 2007 [2]) に

も触れながら、ジェスチャー・タイプについて McNeill (1992 [3]) の定義する「登場人物／観察者の視点」の出現傾向を分析する。その結果、日本語の空間描写では、個人差はありながらも「登場人物の視点」から語るという全体的傾向がみられる一方、英語の空間描写では「観察者の視点」が顕著であることを例証する。

[1] *Embodied Interaction: Language and Body in the Material World*, CUP. [2] 「事象のフレーム化類型の再定義に向けて」『心とことば--進化認知科学的展開』研究報告書. [3] *Hand and Mind*, U of Chicago Press.

### “Pragmatic Implications of Historical Data: Speech Acts in the Flux of Power”

Michi Shiina (Hosei University)

This is a case study in historical pragmatics with a focus on the power relationships in Early-Modern English society. The text to be analysed is taken from the trial of King Charles I and the focus is on how directives and assertives are realised in trial proceedings.

The social hierarchy with the king at the top seems cancelled by another hierarchical system in the courtroom with the judge at the top. The authority seems to reside in the judge, but it is not in himself but in the Court within the juristic system. Investigation of the grammatical subjects and the grammatical structures of the directives and assertives reveals that the discursive power of the judge does not override the King's. On the contrary, the judge is only a voice with which the true authority of the Court exerts its power.

[1] Jucker, A. H. and I. Taavitsainen, eds. (2008) *Speech Acts in the History of English*, John Benjamins, Amsterdam.

第三室 (11月21日午後)

司会 小畑美貴 (東京理科大学)

### 「投射の問題における『一致の問題』」

三輪健太 (学習院大学大学院)

Chomsky (2013 [1], 2014 [2]) は、投射の問題を扱う中で、生成文法の端緒ともいえる句構造規則の中心概念であった内心性を破棄し、ある統語対象物のラベルは、統語演算の基本操作である併合では規定されず、ラベルを決定するためのラベル付けアルゴリズムの適用によって決定されると主張している。この新たな枠組みが導入されるにあたり、自然言語に見られる操作である一致に関して、従来指定されていたモデルとは異なるモデルが提示され、これにより2種類の一致のモデルが混在することとなった。しかし、言語を言語外インターフェイスから要請される条件への最適解であるとする「強い極小主義のテーゼ」の観点からすると、これらの一致のモデルが独立に存在するという想定は望ましくない。

本発表は、2種の一致の異同を明らかにすることで、これらが別個の操作ではなく、投射の問題を解決するための操作が、異なる適用環境によって形を変えて顕現したものであると主張する。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.  
[2] “Problems of Projection: Extensions,” ms., MIT.

### 「一致関係が成立しない併合操作について」

三好暢博 (旭川医科大学)

人間言語に固有である移動現象の解明は必須の課題である。この点において、連続循環移動の中間着地点間の移動を、当該の移動を保証するためだけの素性を仮定せずに導出することは理論的には非常に重要である。本稿の目的は、連続循環移動をラベル決定のアルゴリズム (Chomsky (2013[1], 2014[2])) から導出するという立場の経験的妥当性を検証し、その理論的意義を探ることにある。具体的には、スカンジナビア・ゲルマン語のCPに生起する虚辞の分布特性等がラベル決定のアルゴリズムの予測と矛盾するものではないことを示す。その上で、*allege/wager* 類動詞補文の特性も (Bošković(1997[3]), Postal(1974[4])), ラベル決定のアルゴリズムの観点から自然な説明が与えられることを示す。本発表の議論主要な帰結は以下2点である①EPP/edge素性のみによって駆動される操作によってSpec-Head関係を構築す

ることはできない。②従来、移動の最終着地点に設定されてきたEPP/edge素性はシステムから除去できない。

[1] “Problems of Projection,” *Lingua*. [2] Problems of Projection: Extensions, ms. [3] *On Raising*. [4] *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*.

### 『不完全介在』状況下における移動と一致」

岡俊房 (福岡教育大学)

「不完全介在」(Chomsky (2000)[1]等)の観点から繰上げ構文、*tough*構文、二重目的語構文、及びアイスランド語の与格-主格構文を考察し、移動と一致及び動詞句・形容詞句内部構造について提案する。例えば英語繰上げ構文において移動前の素性一致は阻止されるが (Boeckx (2008)[2]等)、実際に移動が可能な場合、主格DPは一気にTNS指定部に移動するのではなく、介在句を飛び越えてTNSの探索領域内の語彙機能範疇指定部に着地し、TNSと素性一致をしてからTNS指定部に移動すると考える。この派生が可能かどうかの言語間・言語内相違は、途中下車用の指定部を提供する語彙機能範疇と他の語彙範疇機能の配列順序に関わるパラメタ的変異として捉える。アイスランド語の方言差 (Sigurðsson & Holmberg (2008)[3]等) については、機能範疇の素性構成の違いに還元していく。

[1] “Minimalist Inquiries: The Framework,” in *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*. [2] *Aspects of the Syntax of Agreement*. [3] “Icelandic Dative Intervention: Person and Number are Separate Probes,” in *Agreement Restrictions*.

第四室 (11月21日午後)

司会 澤田治 (三重大学)

### 「演繹される推意と創作される推意」

吉村あき子 (奈良女子大学)

コミュニケーションにおける推論メカニズム、特に発話の推意導出に、どのような推論規則が貢献しているかは未解明である。

Grice(1989[1])でも、具体的(論理的)推論規則への言及はなく、Sperber and Wilson (1995<sup>2</sup>[2])でも、オンライン発話処理には演繹規則の削除規則のみが関わる、という言及にとどまる。さらに、ほとんどの推意に関する先行研究は、単一の発話から推意が引き出されることを前提にしている。本発表は、メタファーや寓話・例示を含む発話解釈プロセスを分析し、a)推意導出にはPeirce (Buchler(1955)[3])のアブダクションと抽象化が貢献していること、b)オンライン発話処理に統一的制御機構が働いていること、c) 推意計算は、複数の文からなるストーリー発話を入力にすることができること、を明らかにする。

[1] *Studies in the Way of Words*, Harvard UP. [2] *Relevance*, Blackwell. [3] *Philosophical Writings of Peirce*, 150-156, Dover.

### 「量化解釈を受ける空項の作用域」

藏藤健雄(立命館大学)

Takahashi (2008[1]) は、量的に解釈される空項の存在を指摘し、(a)作用域平行性と(b)曖昧性回避効果(cf. Fox (2000[2]))の観察に基づき、空項は、英語のVP削除と同様、削除現象であると主張している。本発表では、(a)は部分的に正しいが、否定、条件節、内包述語が関与する場合成立せず、(b)は弱交差現象に関して誤った予測をすることを指摘する。代案として、空項は文脈で卓立した属性/関係を指示し、選択/スコア関数を用いて解釈されると主張する。「ほとんど」等の量化表現は Hackl (2009[3]) の分析を採用することで選択関数分析が可能となる。また、部分的な作用域平行性は統語的なプライミング効果によって生じている可能性があることを指摘する。

[1] “Quantificational Null Objects and Argument Ellipsis,” *LI* 39. [2] *Economy and Semantic Interpretation*, MIT. [3] “On the Grammar and Processing of Proportional Quantifiers,” *NLS* 17.

### 「親子の会話に基づいた子供の文生成と意味理解」

深谷修代(芝浦工業大学)

CHILDESから収集した親子の会話に焦点を当て、文生成と意味理解の発達を分析する。一

般的に、意味理解の方が文生成よりも発達が早いと言われている。しかし、Hendriks (2014[1])は、その逆の場合もあることを指摘している。where疑問文は、他のwh疑問文と比較して、初期からSAIが観察される。もし、意味理解の方が早く発達するならば、子供は極めて早い時期から、親のwhere疑問文を適切に理解していることになる。

本研究発表では、文生成については、子供のwhere疑問文のみを分析するのではなく、聞き手である親の反応も分析する。そして、初期のwhere疑問文は、大人と同じ形に見えても、聞き手に伝達できていない場合が多いことを指摘する。意味理解については、親のwhere疑問文に対して、子供はどのように答えているのか分析する。さらに、子供の答えが適切であるかを確かめるため、その後の親の発話も調査する。その結果、徐々に意味理解が発達することを指摘し、最適性理論を用いて説明する。

[1] *Asymmetries between Language Production and Comprehension*, Springer, Dordrecht.

第五室(11月22日午前～午後)

司会 堀田優子(金沢大学)

### 「分詞構文と関係節——主節との論理関係に焦点をあてて——」

田中秀毅(摂南大学)

分詞構文(接続詞を伴わない場合)と関係節は、主節に対して一定の論理関係が推論されることがある。この類似性はQuirk et al. (1972[1])で指摘されているが、これまでの研究では、関係節と主節の論理関係は分詞構文のそれに比べて議論されることが少なかった。本発表では、非時間的な解釈(理由・譲歩・条件)に焦点をあて、分詞構文と関係節(関係代名詞が主格の場合)を比較する。分詞構文の解釈には、分詞の語彙特性と主節が表す事態の特定性が関わることが指摘されている(cf. Stump (1985[2]), 早瀬(2002[3])).本発表は、関係節の解釈について、関係節の用法の区別(制限・非制限)と先行詞の指示性が関わると主張する。さらに、主節主語(=関係節の先行詞)が数量詞を含んでいる場合に、関係節の解釈が影響されるのに

対して、分詞構文の解釈は影響されないことを指摘し、その原因の解明を試みる。

[1] *A Grammar of Contemporary English*, Longman. [2] *Semantic Variability of Absolute Constructions*, Reidel. [3] 『英語構文のカテゴリ一形成』勁草書房。

### 「動詞派生前置詞barringの通時的発達」

林智昭 (京都大学大学院)

barring, concerning, during, exceptなどは分詞由来の前置詞とされる (安藤 2005[1])。先行研究においては、これらの「動詞派生前置詞」と呼ばれる現象が、どのような通時的変化を経て動詞語幹の機能的特質を喪失し、前置詞的特徴をもつに至った (「脱範疇化」した) のか、文法化の観点から分析が行われてきた (秋元 2002[2]など)。しかし、「除外」の意味を表すbarringの通時的発達に関しては、詳細な検討が行われているとは言いがたい。そこで本発表では、OEDから収集したexcludingの品詞的振る舞いを分類することにより、通時的発達を考察した林(2013[3])を援用し、barringの分析を行う。OED、歴史コーパスのデータを検討し、19世紀後半から20世紀前半にかけて、barringの前置詞的用法が定着していったことを示す。

[1] 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 [2] 秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 [3] 林智昭 (2013) 「excludingの用法の歴史的变化—文法化の観点から—」 『言語科学論集』 19.

司会 柴崎礼士郎 (明治大学)

### 「Bang goes構文をめぐる」

五十嵐海理 (龍谷大学)

本発表ではthe ‘Bang goes’ constructionと呼ばれる(1)のような文の多義性と発展について考察することを目的とする。

(1) a. Bang went my hopes of promotion! (OALD<sup>8</sup>)

b. Bang went the pistol. (COCA)

(1a)では昇任の期待の消失の意味になっているのに対して、(1b)ではピストルの発砲音を意味している。Taylor (2004[1])ではこの構文は場所句倒置構文やいわゆる引用用法のgoなどいくつかの他の構文・用法との類似性を指摘するとどまるが、本発表では、同一の構文が大きく

異なった意味を表すことを、goの意味の多義性と変遷から説明を試みる。また、20世紀前半までの例にはgoが音放出や消失ではなく、移動の意味 (であり、かつ結果句) を伴う場合もあるが、それらについても考察する。

[1] “The ecology of constructions,” *Studies in Linguistic Motivation*, ed. by Günter Radden and Klaus-Uwe Panther, Mouton de Gruyter.

### 「英語進行形構文の命令的用法—認知言語学的考察」

清水啓子 (熊本県立大学)

英語進行形構文の多義性について多くの研究がある中、命令的な機能に言及している研究は極めて少ない。本発表はこの命令的機能を持つ進行形構文に着目し、その機能の創発を文法化現象と捉えて、この進行形が法助動詞の義務的用法へ機能的に発展していく過程にあることを示す。文法化の先行研究では、未来用法がその文法化の進んだ段階で命令用法を発達させ、その逆はないと提案される[1]が、未来から命令では文法化が認識的用法から義務的用法へという方向になり、一般的な法助動詞の変化方向に逆行する。本発表では、進行形においては未来概念からではなく意図(intention)から直接に命令用法が発達していると提案する。話者の意図性と認識性という二種の概念を明確に区別し、一人称主語進行形で前景化される話者の意図という直接的な心理状態が、間主観性の強調、主体化を経て、義務的モダリティ概念(effective control [2])を発生させているという変化の道筋を提案する。

[1] Bybee, J., R. Perkins and W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar*, The University of Chicago P. [2] Langacker, R. W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*, Mouton de Gruyter.

### 「Forbidのfrom-ing構文—通時的・共時的視点から見た現代英語の変化—」

家入葉子 (京都大学)

動詞forbidは、現代英語では不定詞構文を従える場合と動名詞構文を従える場合がある。より確立した構文として認められているのは不定詞構文であり、Shastri (1996[1]) のように、

forbidの動名詞構文を「標準的」でない英語の特徴であるとする研究もある。一方で、forbidが動名詞を従える傾向が近年の英語で拡大している事実はよく知られており、動名詞構文を“unidiomatic”とした Fowler (1926) の *A Dictionary of Modern English Usage* での記述は、同書を改訂した Burchfield (1998) によって修正された。Burchfield は、動名詞構文を事実上認める加筆を行っている。本発表では、イギリスの高級紙、大衆紙の調査を通じて、forbidの動名詞構文の拡大が顕著である事実を指摘し、近年、コーパスの利用により徐々に明らかになってきている現代英語の「変化」の一例を示す。同時に、forbid構文の史的变化を扱った Iyeiri (2010[2])、Iyeiri (2011[3]) との比較対照を行い、現代英語の変化を英語史上の変化の軸上に位置づけるとともに、通時的視点・共時的視点の融合をはかる。

[1] “Using Computer Corpora in the Description of Language” [2] *Verbs of Implicit Negation and their Complements in the History of English* [3] “Early Modern English Prose Selections”.

第六室 (11月22日午前～午後)

司会 柳朋宏 (中部大学)

### 「名詞修飾形容詞の歴史的変遷について」 茨木正志郎 (北海道教育大学)

名詞修飾形容詞の通時的変化を扱う際に、統語位置、強弱屈折、限定・叙述解釈についての議論が不可避であるが、これらが当該分野の議論を複雑にしている。本発表の目的は、古英語と現代英語の諸特性を整理しながら、形容詞の通時的変化に統語的説明を与えることである。まず、主な先行研究に Fischer (2000[1], 2001) や Haumann (2010[2]) があるが、どちらの分析にも理論的経験的問題があることを指摘する。そして、古英語では自由に名詞後位の位置に現れていた形容詞がなぜ現代までに前置されるようになったのかを考察し、その通時的変化に説明を与える。具体的には、分離DP構造と R(elater)P 構造 (den Dikken (2006)) を採用し、形容詞は RP 内で名詞と主述関係を持つ場合に叙述の解釈を持ち、aP 内に基底生成する場合に限定の解釈

を持つと主張する。古英語では叙述の解釈を得た形容詞は RP 内に留まっていたが、屈折の水平化により名詞との修飾関係が形態的に具現しなくなったため、名詞前位の位置に繰り上がらなければならなくなった。

[1] “The Position of the Adjective in Old English,” *Generative Theory and Corpus Studies*, [2] “Adnominal Adjectives in Old English,” *ELL* 14.

### 「パラメータ再考: Broad Syntaxの視点から見た言語の共時的・通時的多様性」

保坂道雄 (日本大学)

1980年代、パラメータ概念の導入により、言語獲得から共時的及び通時的多様性の問題まで一気に解決する道が開け、生成文法理論は説明的妥当性の段階に至ったと言われる。しかしながら、現在、生物言語学へと飛躍する過程において、パラメータの概念について再考を余儀なくされているのも事実(強い極小主義のもと、その存在意義が問われている)である。Borer-Chomsky Conjecture に依拠する素性に基づく新たな提案 (Roberts(2012)[1]他) もその一つであるが、Boeckx(2015)[2]のようにパラメータ自体を否定する提案もなされている。本発表では、空主語の問題を共時的・通時的視点から再度取り上げ、思考の言語(Narrow Syntax)と伝達の言語(Broad Syntax)を区別する動的言語モデル(保坂(2014)[3]) に立脚し、言語の多様性の問題は、Broad Syntaxの領域で扱うべきであることを論じていく。

[1] “Macroparameters and Minimalism” in *Parameter Theory & Linguistic Change*, Oxford. [2] *Elementary Syntactic Structures*, Oxford. [3] 「格の存在意義と統語変化」『言語の設計・発達・進化』開拓社。

司会 本間伸輔 (新潟大学)

### 「定形補部節における時制の一致と二重接触について」

金子義明 (東北大学)

英語は時制の一致現象を示す言語であるが、主節動詞が過去時制で潜在的に時制の一致が可能な環境にある補部節に現在時制が生起する場合があります、二重接触(double access=DA)現象

と呼ばれている(cf. Enç (1987[1])). 例えばJohn heard that Mary is pregnant. では、補部節の内容は、主節主語のJohnが耳にした過去時と、話者による文の発話時(現在時)の両方で成り立つと解釈される。本発表では、(i)主節の最上位における話者の発話行為を表す機能範疇の存在(cf. Kaneko (2014[2])), (ii)DAの補部節CPの主節TPの領域外へのLF移動(cf. Uribe-Echevarria (1994[3])), (iii)痕跡位置のCPにおける直示的現在時制から非直示的現在時制への再解釈、の3つの提案に基づく分析を提示する。議論の過程で、直示的時制と非直示的時制の同定子の相違、DAにおける補部節CPのLF移動の要因、CP移動による連鎖の認可条件、等々を論ずる予定である。

[1] “Anchoring Conditions for Tense,” *LI* 18. [2] “Remarks on SOT in English,” *Explorations in Eng. Linguistics* 28. [3] *Interface Licensing Conditions on NPIs*, PhD diss., UConn.

### 「ラベル付けアルゴリズムの観点からの文主語の再検討」

谷川晋一 (福岡大学)

本発表は、Chomsky (2013[1], 2014[2]) のラベル付けアルゴリズム (LA) の観点から、英語の文主語構文を再検討し、空移動仮説に沿った新しい分析を提示する。LA及び素性継承の仕組みを精緻化した上で、文主語構文の派生を明確化し、その統語特性を適切に説明することを目指とする。まず、{XP, YP} 構造においては、その両方が解釈不可能素性を持つ場合にのみ、agreementが生じ、適切なラベルが得られる旨の提案を行う。次に、この提案に従って、文主語がTPと併合して得られる {CP, TP} 構造では、 $\phi$ 素性に加えて、Force素性もCからTへと継承される必要があり、これによって、当該構造に適切なラベルが付与されると主張する。最後に、本分析によって、文主語の特異な統語特性を適切に説明できることを示す。

[1] Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49. [2] Chomsky, Noam (2014) “Problems of Projection: Extensions,” ms., MIT.

### 「動詞句内・動詞句外存在文の統語構造について」

大宗純 (関西外国語大学大学院)

there存在構文の統語構造については、Milsark (1974 [1])をはじめとし、多くの分析がなされてきた。中でも、一般動詞を伴う存在文は、動詞句内存在文 (e.g. There appeared a ship on the horizon.) と動詞句外存在文 (e.g. There ambled into the room a frog.) の二種類に分類される。特に、動詞句外存在文は、意味的・統語的に興味深い特徴を示し、その統語構造については解明されるべき問題が残されている。例えば、動詞句外存在文に非能格動詞が使用される理由や、論理的主語が義務的に文末に現れる理由を説明する必要がある。本発表では、Chomsky (2001 [2])等によるミニマリストプログラムの枠組み内で、Acedo-Matellán and Mateu (2014 [3])等の語彙統語論的アプローチを応用することで、存在文の統語構造を明らかにする。具体的には、ルートの併合位置によって、義務的Th/Exの有無が定まり、その結果が動詞句内・動詞句外存在文の統語構造の違いとなって現れると主張する。

[1] *Existential Sentences in English*, doctoral dissertation, MIT. [2] “Derivation by Phase,” *Ken Hale: A Life in Language*. [3] “From Syntax to Roots: A Syntactic Approach to Root Interpretation,” *The Syntax of Roots and the Roots of Syntax*.

第七室 (11月22日午前～午後)

司会 小川芳樹 (東北大学)

### 「名詞句叙述述語について——一致操作の観点から」

山口真史 (大阪大学大学院)

本発表では、John arrived at the station a happy man.の様に、名詞句が叙述述語として用いられる例に対してChomskyのPhase理論に基づいて統語的認可条件について主張する。先行研究(Asada (2013[1]))ではarriveなどの非対格動詞のみが名詞句叙述述語を選択できるとされているが、John delivered the salmon a happy man.の様な他動詞や非能格動詞も名詞句叙述述語を選

扱える例を得た。また、\*John delivered the salmon the frozen fish.など目的語指向の叙述述語を含む例は容認されない。これらの分布を捉えるため、叙述述語は補部に述語句を選択する機能範疇を主要部として構成されると主張する。名詞句叙述述語は解釈不可能な $\phi$ 素性を持つと仮定し、その名詞句が意味上の主語である名詞句と一致操作を行い、叙述関係が結ばれると提案する。一致操作に関しては、Zeijlstra (2012[2])で提案されている反転一致を用いる。これを用いることで、主節主語とは名詞句叙述述語は一致操作を行えるが、目的語とは一致操作を行えず、完全解釈の原理に違反し、非文法的となると主張する。

[1] “Depictive Secondary Predication Revisited,” *Proceedings of Kansai Linguistic Society* 33 [2] “There Is Only One Way to Agree,” *The Linguistic Review* 29.3, 491-539.

### “Category-Sensitivity in Copularization: A Dynamic View”

Masaaki Fuji (Tokyo University of Marine Science and Technology)

In her typological study of copulas, Pustet proposes an implicational hierarchy on the type of predicate that a copula can combine with: Nouns > Adjectives > Verbs (cf. [2]). This hierarchy, i.e., copularization hierarchy (CH), says that if a lexical item belongs to a predicate type that is positioned to the left of the cut-off point between copularizing and non-copularizing predicates, then the lexical item in question must appear with a copula. The first aim of this paper is to argue that CH is also operative within a single language by drawing on data from Maritime English, AAVE and child English. The second aim is to pursue the possibility that CH need not be stipulated but follows from general principles if we adopt a process-oriented/dynamic approach to possible grammars (cf. [1]).

[1] Kajita, M. (1997) “Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Lg,” *Studies in English Linguistics*, ed. by M. Ukaji et al. [2] Pustet, R. (2003) *Copulas*, Oxford.

司会 森田順也 (金城学院大学)

### 「接頭辞a-の範疇と史的発達」

長野明子 (東北大学)

*aboard, asleep*等に残るa-は、英語の接辞の中でも分析困難なもの1つである。a-形は形容詞とされるが、他の派生形容詞と異なり、英語の一般的な形容詞と異なる振る舞いをする (Beard (1995)[1])。本発表では、a-形の特殊性は、a-が英語では珍しい機能範疇Predの形態具現 (Bowers (1993)[2], Yokogoshi (2005)[3])であることによると論じる。厳密には、stage-level指定を持つPredである。そして、そのような接辞が生じた背景には2段階の通時的変化があることを、*OED*から収集した約330のa-形の分析を通じて示す。まず、高頻度のon/in-PP述語(*be on board*)において、on/inがPからPredへ移動し、かつ形態的に拘束化するという文法化が起こった。次に、文法化でできたa-形の集合から、 $a-X \Leftrightarrow \text{PredP}$ ,  $a \Leftrightarrow \text{Pred}$  という対応が抽出され、これが19・20世紀に新語形成能力を持った。第1期a-形と第2期a-形は、対応するon/in述語の有無及び動詞基体の生産性において異なる。

[1] *Lexeme-Morpheme Base Morphology*, SUNY Press [2] “The Syntax of Predication,” *LI* 24, 591-656 [3] “On the Structural Change of Small Clauses,” *EL* 22, 82-102.

### 「pro-form ‘one’ の生起条件」

猿渡翌加 (大阪大学大学院)

本発表では、pro-form ‘one’ (以降one) の分布制約においてLlombart (2002[1]), Murasugi (1991[2]), Schütze (2001[3])を比較考察し、より妥当な分析を提示する。Llombartは、oneをNP削除の観点から分析しているため、削除が関係しない場合(関係節やPP句)のデータを説明できない。Murasugiの分析では、oneはNに基底生成し、Nの投射のsisterの位置に修飾語句が必要であるとする一般化を立てているが、I bought {some/ many /a few} (\*ones) that I like. の関係節でonesが認可されないことを説明できない。本発表では、Schützeが提案する条件を一つにまとめ、oneはNに基底生成し、修飾語句との関わりでNの要素を音的に埋める必要がある場

合に (place holderとして) 生起することを提案する。

[1] “Anaphoric one and NP-ellipsis” [2] *Noun Phrases in Japanese and English*. [3] “Semantically Empty Lexical Heads as Last Resorts”

### 「非対格動詞文の動作主性について」

大澤聡子 (鈴鹿医療科学大学)

非対格動詞は自発性を特徴とし通常、主語に動作主性は現れないが、主語がvolitionalである場合は動作主解釈が可能である (John intentionally fell.)。本研究は非対格動詞文に現れる主語の動作主解釈が何に起因するかを論じ、主語解釈メカニズムの一端を明らかにすることを目的とする。動作主解釈が可能な場合、当該の動詞には非対格動詞と非能格動詞の2つの可能性があるため、自動詞分類テストに基づき動詞タイプを特定する。その結果、当該の動詞が動作主性を帯びても非対格の性質を示すことから、非対格動詞文の動作主性が語彙的意味に起因するのではなく別の独立した解釈メカニズムに依存すると主張する。本稿では語彙的意味だけでなく構造的な主語位置が潜在的に動作主としての解釈に関与し、統語構造で定義される主語-述部関係(den Dikken 2006[1])が動作主性解釈を決定すると提案する。

[1] *Relators and Linkers*, MIT Press, Cambridge, MA.

第八室 (11月22日午前~午後)

司会 小野創 (津田塾大学)

### “A New Approach to the Mystery of the Factivity in Root Transformations”

Maiko Yamaguchi (Osaka University (graduate student))

In my previous work, I have shown that the conventional analyses which assume the correlation between the factivity and the C-head selections regarding availability or unavailability of the Root Transformations in the embedded clause ([1] *inter alia*) do not seem to capture the reality. Then, I have proposed an alternative approach, which involves “Double *o* Constraint,” to solve the problem for the

precedent researcher’s analysis in [2]. Yet, even for my analysis [2], the fact that Raising to Object construction, which is considered here as a species of Topicalization in that it involves Topicalization at the outset of the derivation, is disallowed when the *koto* C-head is used with (Class D) factive predicates was still problematic.

In order to fully account for the remaining issues of my previous work, I will introduce a new perspective in this presentation.

[1] Miyagawa, Shigeru (2012) “Agreements that Occur Mainly in the Main clause,” *Main Clause Phenomena: New Horizons*, ed. by Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman and Rachel Nye, Benjamins. [2] Yamaguchi, Maiko (2015) “Is Factivity a Real Culprit in Disallowing the Root Transformations in Japanese?,” poster presented at WAFL 11, University of York, UK.

### “Planning Association of Causes and Consequences in Japanese”

Mikihiro Tanaka (Konan Women’s University)

This study investigates how people use the causality information (e.g., cause and consequence) in Japanese sentence production, by examining the nature of participants’ continuations to discourse fragments in four experiments. Firstly, I found that people generally prefer to continue a discourse from the previous consequence, and this preference is moderated by a recency effect [1], [2]. Secondly, I found the causal content of the continuation is influenced by the type of the previous context, and typicality of events. I suggest that people consider an absence of either cause or consequence to be a gap, and they seek to fill this gap in their narrative. Furthermore, people do not simply use causality relations to produce an utterance in their discourse; they use their world knowledge and features of textual and temporal recency to produce a successful narrative.

[1] Simner, J. and Pickering, M.J. (2005) “Planning Causes and Consequences in Discourse,” *Journal of Memory and Language* 52, 226-239. [2] van den Broek, P., Linzie, B., Fletcher, C. and Marsolek, C. D. (2000) “The Role of Causal

司会 吉田悦子 (三重大学)

### 「重複発話の日英語比較：ジャンル・心的距離・言語の違いは協調性の産出にどう関わるか」

竹田らら (東京電機大学)

管見の限り、会話分析や日英語比較の先行研究では、複数ジャンルで同一参加者がどう発話を重複させるかには焦点があてられていない。本発表では、日英語の親しい大学生同士と、初対面の大学教師と大学生 (前述の収録参加者の1名) による複数ジャンルの会話をデータに、メタコミュニケーション (Bateson (1972)[1]) から、ジャンルや心的距離の違いが重複発話と協調性の関係にどう影響するのかを解明する。分析の結果、言語や心的距離の違いよりも、ジャンルの違いが頻度や機能に大きく影響することを明らかにした。また、自由会話では相手の話を軌道に乗せて先に進ませる機能が、課題達成談話では参加者が1つの話題に2つの見方を共存させる機能が見られた。以上より、自由会話の重複発話にはリズム良く会話を展開させられるようにする協調性が、課題達成談話の重複発話には発話内容への共感や同調を明確にしつつ合意形成につなげる協調性があると指摘した。

[1] “A Theory of Play and Fantasy,” *Steps to an Ecology of Mind*, ed. by Gregory Bateson, 177-193, Jason Aronson, New Jersey.

### 「摂食に関する語彙による《思考》と《理解》のメタファー –メタファーにおける身体性の反映の詳細度に注目した日英対照研究–」

大神雄一郎 (日本学術振興会特別研究員)

日英語には“消化する”や“digest”のように、摂食に関する語彙によって《思考》や《理解》の意味を表す様々なメタファーが認められる(鍋島 (2004[1])など参照)。本発表では、基本的に谷口 (2003[2])の考え方に依拠し、これらのメタファーは“主題概念のスク립ト構造と喩辞概念のスク립ト構造がアナロジカルに

結びついたもの”であると見る立場から、日英語それぞれのメタファーにおける主題概念と喩辞概念の間でのスク립ト構成要素の対応関係に注目して分析を行う。これを通じ、日本語においては英語と比べ、喩辞概念のスク립ト構成要素が、より細やかに主題概念に対応付けられる傾向が示される。上記をふまえ、ここで問題とするメタファーに関して、日本語には「身体性をより詳細・忠実に知性的概念に結びつける」という特徴が、対して英語には「身体性をより合理的・経済的に知性的概念に結びつける」という見通しが指摘される。

[1] 「理解」のメタファー –認知言語学的分析– 『大阪大学言語文化学 Vol.13』 [2] 「類似性と共起性」 『日本認知言語学会論文集 第3巻』

### “Translanguaging in a Group Discussion in a CLIL Classroom at a Japanese University: A Time-Aligned Corpus Analysis”

Keiko Tsuchiya (Tokai University)

*Translanguaging* is an emergent concept in bilingualism, which refers to language practices of plurilingual individuals and the pedagogy where those occur [1]. This study analyses Japanese and Arabic students’ use of translanguaging (English and Japanese) in a group discussion in a *Content and Language Integrated Learning* classroom at a university. Thus, the English they used is *English as a Lingua Franca* (ELF). Why (function) and how (process) the participants use translanguaging is my central interest. In terms of the former, four functions in translanguaging were identified: (1) addressee specification, (2) assertion, (3) clarification and (4) appealing for linguistic assistance [2]. This study focuses on the second research principle – how translanguaging occurs – in relation to turn-taking structure. The results show two practices which lead translanguaging: the use of (1) English response tokens, and (2) meta-language, before floor-taking in ELF.

[1] Garcia, O. and L. Wei (2014) *Translanguaging*, Palgrave Macmillan. [2] Tsuchiya, K. (2014) “Why Bother Switching to ELF?,” *Waseda Working Papers in ELF* 3.

第九室 (11月22日午前～午後)

司会 澤田治 (三重大学)

### 「否定表現の特性に関する一考察 - トートロジーの用例を中心に -」

山本尚子 (奈良大学)

「否定」は、negationに相当するものとdenialに相当するものに大別できる。前者は、意味論的な概念を表し、例えば、notを含む否定文が当てはまる。一方、後者は、語用論的な概念を表し、notのような否定辞の有無にかかわらず、先行発話などに異議を唱える働きをもつ表現のことをいう。

トートロジー研究の中には、後者の意味で、トートロジーをとらえた研究(中村(2000[1])など)がある。だが、他の否定表現との比較検証は今まで行われておらず、トートロジーが否定表現という範疇の中でどのように位置づけられるのか明確ではない。

本発表では、「否定」を先に示した後者の意味でとらえる。そして、Carston (1996[2])らの「echoic」という概念を用いながら、トートロジーと、メタ言語否定、アイロニーを比較検討し、否定表現の範疇におけるトートロジーの位置づけを明らかにすることを目的とする。

[1] 「勝ち勝ち」「負け負け」 - トートロジーに潜む認知的否定」、『言語』11, 71-76. [2] “Metalinguistic Negation and Echoic Use,” *Journal of Pragmatics* 25, 309-330.

### 「発話の帰属元から見たアイロニーの段階性」

盛田有貴 (奈良女子大学大学院)

Wilson (2009) は、アイロニー発話を、帰属的 (attributive) かつ、発話の帰属元に対し、話し手の乖離的 (dissociative) 態度を示すものとして定義付けている。本発表では、Wilson (2009) の2つの定義特性のうち、アイロニー発話の帰属元に焦点を当てる。

近年のアイロニー研究を概観すると、誇張表現や関連する表現との比較から、アイロニーを独立したカテゴリとして見なす傾向にある。しかし、独立したカテゴリの中で、アイロニーとして理解され得る表現は多様である。また、先

行研究において、アイロニーの段階性の存在が示唆されてきたにも関わらず、実際に段階性に焦点を当てた分析は僅かである。

本発表では、先行研究の示唆を踏まえ、実例の検討を行い、アイロニー発話の帰属元の観点から、聞き手にとって発話の帰属元の特が容易である程、聞き手の当該発話の認識に貢献することを明らかにする。

[1] Coleman and Kay (1981) “Prototype Semantics: The English Word Lie” [2] Wilson (2009) “Irony and Metarepresentation”

司会 柳朋宏 (中部大学)

### 「チョーサーの言語の身体性 - 『トパス卿の話』にみる<漸減化>の認知プロセス -」

中尾佳行 (広島大学)

内と外を分ける境界のある空間は、詩人チョーサーの生涯において、重要な意義を持っていた。英仏百年戦争(1339-1453)ないし政治的内紛の真っ只中において、ロンドンの壁ないし体制の内にいるか外かは、命に係わる問題でもあった。

チョーサーは、この境界線の立ち位置を、フィクショナルスペースにパラレルに繋げ、言語主体が事態把握する弾力的な視点としている。空間を広げたり、縮めたり、自在に調整するが、その重点は哲学的・宗教的な広がり(“Vision”)よりは、生身の人間の狭まりにあったように思える。

本発表では、『カンタベリー物語』の一つ、「トパス卿の話」を取り上げ、チョーサーが境界の<漸減化>を拡張し、それぞれの縁に鑑み、どのようにテキスト(マニユスクリプト・コンテキスト)及びその言語を再定義しているかを明らかにする。スキーマ理論(Langacker 1999<sup>1</sup>)を援用し、これまでの研究の不十分さを補充し、テキスト・言語に通底する新たな読みの可能性を提供したい。

[1] Langacker, R. W. (1999) “Chapter 4: A dynamic usage-based model,” *Grammar and Conceptualization*. [2] Burrow, J. A. (1984) *Essays on Medieval Literature*.

### “Pronoun Retention in Old and Middle English Relative Clauses”

Michiko Ogura (Tokyo Woman's Christian University)

Pronoun retention, in which “the head noun remains in the embedded sentence in pronominal form,” says Comrie (1981), is “a rather marginal existence” in English. Visser (1963-73) states that it is “well-known that instead of the later opposition *who/whose/whom* (relative pron.) the older language availed itself of the opposition *þat (þe) he/ þat his/ þat him/ þat hine* to express the same relations.” In this paper I shall focus on the occurrence of this construction in Old and Middle English, try to prove that during the medieval period it had been neither dialectal nor vulgar but a kind of recapitulation in the nominative, genitive and dative/accusative cases. I shall also consider the reason for its choice as a structural and stylistic variety in the history of the relative pronoun with illustrative examples.

[1] Comrie, B. (1981) *Language Universals and Linguistic Typology*, Blackwell, Oxford. [2] Visser, F. Th. (1963-1973) *An Historical Syntax of the English Language*, Brill, Leiden.

## 〈公開特別シンポジウム〉

A室 (11月21日午後)

### 「日本の英語学研究者と語彙意味論研究」

司会 岩田彩志 (関西大学)

近年は、英語を主たる分析対象とする研究がめっきり減っている。あたかも英語は分析し尽くされて、新たな提案をすることが不可能であるかのような風潮である。

本シンポジウムでは、このような風潮に対して、深く掘り下げていけば、英語を対象としてもまだまだ面白い研究をすることが可能であることを示したい。特に、日本にはしっかりとした事実観察に基づく研究の伝統がある。海外での流行りに左右されずに、このような良い伝統を活かしていくことこそが、日本人研究者にとって有望な方向性であることも併せて示したい。

具体的には、語彙意味論で人気のあるいくつかの現象 (結果構文、二次述語等) を取りあげる。そして日本人研究者による独自の提案

(Washio 1997[1], Maruta 1995[2]等) を基にして、そこからどのように議論を発展させていけるかを示してみたい。

[1] “Resultatives, Compositionality, and Language Variation,” *Journal of East Asian Linguistics* 6. [2] “The Semantics of Depictives,” *EL*12.

### 「描写句の機能と動詞句との時間関係について」

講師 藤川勝也 (富山大学)

本発表では、John ate the meat raw.のような描写構文における描写句の機能について考察する。Maruta (1995 [1]) は、描写句は述語ではなく、動詞句を修飾する副詞的修飾語であると主張する。しかしながら、Maruta (1995) が描写句として挙げている例は、「名詞句を叙述する形容詞」(e.g. raw) と「行為のタイプを指定する副詞」(e.g. over-the-counter) の2つのタイプに分けられ、両者はいくつかの点で統語的に異なった振る舞いを示す。描写句と呼べるのは前者のみであり、描写句は副詞ではなく述語として機能していることを明らかにする。

さらに、一部の描写句は確かに副詞のような解釈を持つ場合があるが、これらの例は、全ての描写構文において、「描写句は動詞の表す事象の開始時点におけるホスト名詞句の状態を叙述する」と考えることで説明できることを示す。

[1] Maruta, T. (1995) “The Semantics of Depictives,” *English Linguistics* 12, 125-146.

### 「創造的逸脱表現における動詞補部の解釈—Think differentの構文分析から—」

講師 鈴木亨 (山形大学)

Apple社の宣伝文句である“Think different”の構文分析を通じて、動詞補部の選択における創造的逸脱、あるいは拡張表現と思われる事例が、認可されるしくみについて考察する。当該表現は、自動詞に形容詞が後続する形式をとっているが、いくつかの点で標準的な英語としては逸脱的な表現である。意味解釈の面では、thinkを連結動詞とする属性評価の解釈、differentを結果句とする自動詞結果構文の解釈、さらにdifferentを単純形副詞とする副詞的な解釈 (differently/in a different way) などの重層的な

解釈の可能性が考えられる。動詞thinkを中心とする関連表現の文法特性や使用条件を精査することにより、当該表現が現代英語の規範的な文法体系においては逸脱的であるものの、関連表現の語彙・構文的なネットワークを背景にして潜在的に認可されうるものであることを示す。

### 「形容詞結果句と前置詞結果句」

講師 岩田彩志 (関西大学)

結果構文において、形容詞結果句と前置詞結果句のいずれを選択するかについての詳しい分析はほとんどなされていない (wipe the plate {clean/\*to cleanliness}/ dance oneself {to exhaustion/\*exhausted})。そのような中で都築 (2003[1])は形態的要因を考慮に入れたユニークな分析を提案しており、注目に値する。しかし都築の提案する3つの原理は、実は相矛盾する前提に立っている。

本発表では、「形容詞は状態を、前置詞は過程を表す」という意味的差異をCroft (1990[2])の因果連鎖の考えと組み合わせれば、形容詞結果句と前置詞結果句の意味的違いを一貫して捉えられることを示す。形態的複雑さは真の要因ではなく、この意味的違いにより、結果句の選択を説明できる。

[1]「行為連鎖と構文II:結果構文」『認知文法論II』大修館書店。 [2]“Possible Verbs and Event Structure,” in Tsohatzidis (ed.) *Meaning and Prototypes*, Routledge.

### 「構文の成立過程とその後の展開—半動名詞構文を中心に—」

講師 大室剛志 (名古屋大学)

主語指向の二次的叙述述語に関わる英語の半動名詞構文 (e.g. He was spending his vacation **working at the factory.**) は、伝統文法家Poutsma (1928: 903[1])によれば、前置詞付きの動名詞構文から前置詞がなくなり、動名詞が現在分詞に変化することにより成立した構文と言える。動名詞が現在分詞へと変化すると、その後の展開としては、現在分詞以外の形容詞句、前置詞句、過去分詞句といったいわば変異としての叙述述語が生じると予測される。

本発表では、この変化とその後の叙述述語の展開について、Arai (1997[2])で提示された貴重な言語資料と拙論 (1988[3], 2015[4])での議論を基に、電子コーパスから得られる新たな言語資料を加えて論じることとする。さらに、他の構文での変異形の事例を私自身のこれまでの構文研究から提示することで、上記の成立過程とその後の展開の支持証拠としたい。

[1] *A Grammar of Late Modern English*, P. Noordhoff. [2] “A Corpus-Based Analysis of the Development of ‘In Dropping’ in the *Spend Time In V-Ing* Construction,” *Studies in English Linguistics*, 大修館。 [3]「英語における半動名詞構文について」『言語文化論集』10巻第1号, 名古屋大学。 [4]「動名詞から分詞への変化」『言語研究の視座』, 開拓社。

## 〈シンポジウム〉

B室 (11月21日午後)

### “Unconstrained Merge: Its Consequences and Challenges”

Miki Obata (Tokyo University of Science)

The aim of this symposium is to clarify several issues regarding the operation Merge, which makes it possible to generate an unbounded array of hierarchically structured expressions by forming a new object Z with already-constructed objects X, Y. (Chomsky 2005, 2013) By focusing on the essential operation of Merge, the symposium intends to deepen discussion of relevant issues such as whether Merge is freely applicable or constrained by certain principles and how it is related to other theoretical assumptions including linguistic features, Transfer/Spell-Out, labeling, minimal search, phases, etc. We also clarify theoretical and empirical consequences obtained by examining several issues involved in (un)constrained Merge.

[1] Chomsky, Noam (2005) “Three Factors in Language Design,” *Linguistic Inquiry* 36, 1-22. [2] Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49.

### **“Introduction: On Merge and its Related Issues”**

Miki Obata (Tokyo University of Science)

The purpose of this introductory talk is to give a brief (selective) historical review of the operation Merge and also to clarify the issues the symposium specifically focuses on.

Merge is the operation which simply forms a set by combining  $\alpha$  and  $\beta$ . (Chomsky 2013) Structure-building by Merge needs neither language-specific/construction-specific phrase structure rules nor the  $X'$ -schema, which is a big step forward in the history of structure-building. (Epstein et al. to appear)

Among controversial issues involved in Merge, the following three questions are specifically considered in this symposium: (i) What conditions are imposed on symmetric structures formed by Merge?, (ii) How is Merge related to labels? and (iii) What is truly unconstrained Merge and how can it be applied?

[1] Epstein, Samuel, Hisatsugu Kitahara, and Daniel Seely (to appear) “From Aspects ‘Daughterless Mothers’ (aka delta nodes) to POP’s ‘Motherless’-Sets (aka non-projection): A Selective History of the Evolution of Simplest Merge,” *MIT Working Papers in Linguistics*.

### **“Conditions on Symmetry-Breaking in Syntax”**

Hiroki Narita (Nihon University)

It has been customarily stipulated that every binary phrase  $\{\alpha, \beta\}$  is asymmetrically organized, viz. analyzable either as a “projection” of  $\alpha$  or a projection of  $\beta$ . However, Chomsky (2013) and Narita & Fukui (2014, forthcoming) argue that this “universal asymmetry” stipulation has lost its ground in Merge-based syntax. They specifically argue that certain aspects of syntactic derivation are effectively driven by the need for featurally “symmetric” structures of the form  $\{\alpha_{[F]}, \beta_{[F]}\}$ , where  $\alpha$  and  $\beta$  share a feature  $F$  as the most prominent element within them. In this study, I will identify several important properties of featural symmetry. I will specifically argue that syntactic operations that “desymmetrize” already constructed symmetric structures are prohibited, and that this

condition can derive the effect of Criterial Freezing, among other constraints on movement.

[1] Narita, Hiroki (2014) *Endocentric Structuring of Projection-free Syntax*, John Benjamins. [2] Narita, Hiroki and Naoki Fukui (forthcoming) *Symmetry-driven Syntax*, Routledge.

### **“On Labeling: In Search of Unconstrained Merge”**

Nobu Goto (Toyo University)

One of the questions I want to consider is whether labeling plays an important role in narrow syntax (NS). Chomsky (2013, 2014) and Narita (2014) argue that it has no place in the theory of unconstrained Merge, but I would like to argue that it plays an important role in order to minimize search in NS (Goto 2015). Specifically, I will argue that unlabeled syntactic objects are opaque to search just because they are invisible to NS; see, among others, Chomsky (2000, 2005) and Hornstein (2009). Under this theory, Merge applies freely and search is constrained by labeling, so it follows that there is no special constrain on Merge per se. I will demonstrate that my theory has significant empirical advantages over other approaches to CED effects and that the same mechanism provides a new perspective for null subject phenomena.

[1] Goto, Nobu (2015) “Restricting  $n$  to Two: When Merge Requires Search,” ms., Toyo University. [2] Hornstein, Norbert (2009) *A Theory of Syntax: Minimal Operations and Universal Grammar*, Cambridge University Press.

### **“Escape to Freedom: Interpreting ‘Free Merge’ across Phase Boundaries”**

Marc Richards (Queen’s University Belfast)

I argue here that truly unconstrained Merge (in terms of freedom at the interface) arises only where dependencies are formed directly across a phase boundary, a possibility that is afforded under the so-called ‘weak’ conception of Transfer (Chomsky 2008). My central thesis is that the phase constitutes the maximal domain in which linguistic constraints can apply, so that interpretive freedom emerges across phases but never within a single phase. At PF,

this delivers ordering restrictions up to the phase level but not beyond (contra Fox & Pesetsky 2005). At the CI-interface, this implies that copies (Internal Merge) and repetitions (External Merge) can only be distinguished up to the immediate phase; I demonstrate how this yields pronominal reference constraints and their differential application for free at CI (essentially, the distinction between Principles A and B of the Binding Theory).

[1] Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundational Issues in Linguistic Theory*, ed. by Robert Freidin et al., 133-166, MIT Press. [2] Fox, Danny and David Pesetsky (2005) "Cyclic Linearization of Syntactic Structure," *Theoretical Linguistics* 31, 1-46.

C室 (11月21日午後)

### 「共時的・通時的に探る英語の属格」

司会 宮前和代 (専修大学)

英語史における属格表現の変遷は経験的にも理論的にも興味深い統語現象の1つである。属格語尾の消失は中英語以降of 属格の使用へとつながるが、この屈折語尾は完全に失われたわけではなく、その名残である's は現代語でも生産的である。この'sはなぜ残存し、どのような統語的範疇を占めるのか。また、一時期許された後置属格、分離属格、his属格などはなぜ英文法から消え、一方で二重属格、群属格、絶対属格などはなぜ文法に登場し確立したのか。同じ機能の2つの構造の片方が勝ったのは、あるいは両方が文法に残っているのはどのような事情によるのか。

本シンポジウムはこのような多様な分布・発達を示す英語の属格の歴史的な言語事実を概観し、統語的・意味的な分析を試みるものである。

[1] Miyamae, K. (2010) "The Historical Role of Genitives in the Emergence of DP," *Noam Chomsky and Language Descriptions*, ed. by O. Askedal et al., Benjamins.

「後期古英語から初期中英語の説教集に見られる属格用法の変化」

講師 小池剛史 (大東文化大学)

古英語の属格名詞には、名詞の修飾部また動詞・形容詞等の補部として機能するなど多岐に渡る用法があった。名詞の修飾部の場合、主要部名詞と様々な文法・意味関係において結び付き、また語順についても前置後置いずれも可能であった。これら多様な属格用法は中英語期に入り急激に限定され、その多くはofを初めとする前置詞を用いた迂言構造に引き継がれる。属格用法の変化を観察する資料の一つに、10世紀末成立のエルフリッチによる説教集が挙げられる。これらはノルマン征服以降12世紀に古英語の文章語の伝統から離れ、同時代の言語に合わせて改定がなされている。本発表では、エルフリッチの説教集 (Catholic Homilies First Series) とその12世紀の改定版、主にLambeth 487に収められる説教集を資料とし、古英語後期から中英語期初期にかけての属格用法の変化を辿ることを目的とする。

[1] Allen, C.L. (2008) *Genitives in Early English*, OUP. [2] Swan, M. (2007) "Preaching Past the Conquest," *The Old English Homilies*, Bepols.

### 「初期中英語韻文詩ラヤモンの『ブルート』オト写本における属格」

講師 新川清治 (白鷗大学)

初期中英語韻文詩ラヤモンの『ブルート』はほぼ同時代の二つの写本が現代まで残っている。その一つ、カリグラ写本はオリジナルの古い、あるいは、古風な言語を留めており、もう一つのオト写本はそれを当時の英語に書き改めていると考えられている。このように言語的性格の異なる二つの写本で伝わるラヤモンの『ブルート』は古英語から中英語への過渡期の言語状況を研究する際の貴重な資料となっているが、特にhis属格の最初期の用例を数多く提供するオト写本は属格研究において極めて重要である。本発表は両写本の用例を比較し、属格の形式や構造の初期中英語期における状況を提示することを第一の目的としている。さらに、ここでの考察を出発点として、2009年にマンチェスター大学で開催された所有表現に関するワークショップの成果の一つであるBörjars, et al. (2013[1])における論考を踏まえ、現代英語の所有格の標識'sの性格を検討する。

[1] *Morphosyntactic Categories and the Expression of Possession*, Benjamins.

## 「属格の史的変遷から見えてくる言語変化」

講師 宮前和代 (専修大学)

さまざまな属格表現の史的盛衰を概観すると、それらが密接に関連し合い影響を与え合っているのみならず、その背後に1つの大きな言語変化が存在することが透けて見えてくる。本発表は、その言語変化、すなわち「DP構造の確立」において属格が果たした役割について考察する。

具体的には、Heine and Kuteva (2007[1])の「人間言語の初期段階には各要素の関係を示す機能が存在せず、新しい範疇が導入されることによって『層』が発現する」という仮説を出発点に、英語はその史的過程で(1)機能範疇Dを持つ階層構造、(2)「冠詞」という範疇、(3)構造に依存する格具現化方法を導入し、それによって現代語の名詞構造を確立させてきたことを主張する。そして、属格はこの文法変化の黎明期には「trigger」として、また変化が完了する14-5世紀には「anchor」として大きな貢献を果たしてきたことを論じる。この役割を演じたのがなぜ属格だったのかという理由にも言及する予定である。

[1] *The Genesis of Grammar*, OUP.

D室 (11月21日午後)

## 「相互行為にみられる調和」

司会 村田和代 (龍谷大学)

会話の中には様々な不調和があり、それらを解消するために、ダイナミックな会話の進行に応じて参加者同士の相互行為が行われる。本シンポジウムでは、多様なレベルでの「不調和」の解消を「調和」ととらえ、報告者がそれぞれの理論的枠組みに依拠しミクロの視点からの考察を行う。具体的には、相手との要求の不調和の解消、問題解決と課題達成にかかわる調和、情報量の差の調整を通じた調和、対人関係上の力の不均衡の調整とラポール構築といったテーマをとりあげる。分析するデータとしては、

制度的談話、非制度的談話、自然談話、課題遂行談話が含まれる。英語・日本語の多彩なデータの考察を通して、「調和」をめぐってどのような相互行為が行われているのかを、比較対照研究も取り入れながら明らかにする。

## 『不調和』を解消する相互行為の一方策としての否定疑問文

講師 花崎美紀 (信州大学)

否定疑問文は、以下の2点の特徴を持つと言われる。(1) 日本語否定疑問文の多くはその否定辞を含まない疑問文よりも丁寧であるのに対し、英語では否定疑問文の方が非丁寧である。(2) 否定疑問文は、ある命題の真偽、あるいは、2つの命題のどちらであるかを聞くものであると考えられるが、この問われている命題が一見明かでない否定疑問文もある。

本発表は、日英語の否定疑問文を比較検討しそれぞれの特徴を概観したうえで、否定疑問文とは、従来の研究が述べるような、肯定命題と否定命題のどちらかに偏りがあることを示しつつ、どちらであるのかを聞き手に問う形式であるというのではなく、自分の期待と現実の「不調和」を解消し「調和」状態に達するための相互行為の一方策であると主張する。

## 「問題解決と課題達成に必要な調和へのプロセス」

講師 吉田悦子 (三重大学)

対話において、対話参加者が共通の基盤 (common ground) を形成していくことをグラウンディング (基盤化) と呼ぶ。たとえば、対話者同士が同じ語句や統語構造を反復することは、その方法のひとつであり、相互行為によって談話モデルの構築に寄与している ([1] Brennan and Clark 1996[1]; Pickering and Garrod 2004[2])。本発表では、こうしたグラウンディングの過程と方略を参照しながら、対話参加者がどのようにして課題達成を妨げる「不調和」を解消し、「調和」の段階に移行していくのかを明らかにする。日英の地図課題遂行対話データを利用し、とくに談話の開始時における指示表現のタイプと構文形式のヴァリエーションに焦点を当てる。そして、ミクロ分析により、対話参加者の役割や共有知識の変化が談

話構造のパターン形成に結びついていくことを指摘し、分析の有効性を示す。

[1] “Conceptual Pacts and Lexical Choice in Conversation,” *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*. [2] “Toward a Mechanistic Psychology of Dialogue,” *Behavioral and Brain Science*.

### 『不調和』の多層的展開

講師 武黒麻紀子 (早稲田大学)

社会記号論系言語人類学では、コミュニケーションを指標的「出来事」ととらえ、相互行為の「今・ここ」を基点に、ミクロな場からマクロな世界へと拡がる社会文化史的コンテクストの中で生起するものとする (Silverstein 1993[1]; 小山 2008 [2])。こうした理論的枠組に依拠した本研究は、語用の言及指示的側面に加え社会指標的側面に重きを置いて、「今・ここ」の相互行為やメタ語用レベルで多層的に展開される「不調和」を取り上げる。石垣島のフィールドワークで得た島出身者と移住者間の相互行為データから、情報や対人関係上の力の不均衡とその調整の様子を分析する。メタ語用的談話でも根深い「不調和」に対し、相互行為の「今・ここ」にいる両者は空間指示辞や敬体・常体の転換などを駆使してミクロレベルでの解消あるいは調整を図っている。しかし、標準語や敬語の変遷というマクロな社会文化史的視点から見ると、更なる「不調和」が根底に潜んでいる可能性を考察する。

[1] “Metapragmatic Discourse and Metapragmatic Function,” in John A. Lucy (ed.) *Reflexive Language: Reported Speech and Metapragmatics*, Cambridge. [2] 『記号の系譜 社会記号論系言語人類学の射程』

### 「対人関係上の力の不均衡の調和：ユーモアの表出から考える」

講師 村田和代 (龍谷大学)

相互行為的社会言語学 (interactional sociolinguistics) アプローチからの職場談話研究 (workplace discourse study) において、言語行動、とりわけ対人関係機能に関わる談話ストラテジーの使用は、メンバーが共有する文化的想定 (言語文化および職場文化) に影響を受ける

点が指摘されている (Holmes, Marra, and Vine 2011 [1])。

本発表では、対人関係構築・維持機能を担う談話ストラテジーであるユーモアに焦点をあて、その使用を通して、ミーティングのメンバー間に存在する対人関係上の力の不均衡が、どのように調整されラポールを構築するかについて、ニュージーランドと日本のビジネスミーティング談話から例証する。さらに、それぞれの文化的想定が、ユーモアの発言者、ユーモアのタイプ、展開方法を通して顕在化する有様をミクロの視点から考察する。

[1] *Leadership, Ethnicity, and Discourse*, OUP.

E 室 (11 月 22 日午後)

### 「言語獲得研究から見た普遍文法」

司会 村杉恵子 (南山大学)

人は、なぜ言語を獲得することができるのだろうか。あらゆる言語の話者になりうる属性を持って生まれる幼児は、どのように母語を獲得するのだろうか。

本シンポジウムは、言語獲得に関する研究 (杉崎講師・郷路講師・村杉講師) を踏まえ、理論研究と獲得研究の双方向的関連について考察し、文法理論と言語獲得理論の架け橋の可能性を探る (高橋講師)。

### 「文構造の獲得」

講師 村杉恵子 (南山大学)

幼児は文の構造をどのように獲得するのであろうか。

英語をはじめ世界の言語の言語獲得において主節内で時制を伴わない動詞形式 ((擬似) 主節不定詞) が観察されるが、日本語においても例外ではない (Murasugi, Natanani and Fujii 2010[1] 等)。このとき、幼児は、大人とは異なり、文構造のどの位置で構造を刈り取ってもよいと仮定している可能性がある (Rizzi 1993/1994 [2])。

一方で、幼児は、一定の要素 (オノマトペなど) を基に、動詞的・名詞的な範疇を形式化するが、その過程で、機能的な要素 (v など) が、それ自身とその選択するルート (V) を、一つ

の音声形式であらわす過程がある。(Murasugi and Hashimoto 2004 [3] 等)。

本発表では、文構造の獲得段階に関する二つの仮説について、具体的な例を提示しながら考察する。

[1] “The Roots of Root Infinitives: The Surrogate Infinitives Common in Adult and Child Grammar,” *BUCLD 34 Pos.* [2] “Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: The Case of Root infinitives,” *LA* 3. [3] “Three Pieces of Evidence for the v-VP Frame,” *Nanzan Linguistics* 1.

### 「スルーシングおよびその制約の獲得と普遍文法」

講師 杉崎鉦司 (三重大学)

生成文法に基づく母語獲得研究は、「普遍文法」(UG)を反映した属性が、観察しうる最初期から幼児の母語知識を制約することを示すことにより、UGの存在に対する重要な証拠を与え続けている。

本発表では、「スルーシング」と呼ばれる削除現象の獲得に基づき、理論研究と獲得研究のこのような結びつきについて具体的に議論する。(1)に例示される「スルーシング」は、Merchant (2001[1])によると、非常に多くの言語で観察され、その存在が普遍的であると考えられている。さらに、Merchant (2013[2])による近年の研究では、(2)のような文の非文法性を説明するために、「スルーシングが適用される動詞とその先行詞となる動詞は『態』において同一でなければならない」という生得的な制約の存在が主張されている。

本発表では、日本語を母語とする幼児21名(4歳7か月～6歳6か月・平均年齢は5歳7か月)を対象にした実験の結果に基づき、幼児がこの制約にしたがうことを明らかにし、それにより母語獲得へのUGの関与の可能性を高める新たな証拠を提示する。

- (1) ケンが誰かに会ったらしいが、私は誰にケンが会ったか知らない。
- (2) \*誰かがケンを雇ったが、我々は誰にケンが雇われたのか知らない。

[1] *The Syntax of Silence*, Oxford. [2] “Voice and Ellipsis,” *LI* 44.

### 「比較構文における数量詞解釈：言語の多様性と言語獲得の普遍性に関して」

講師 郷路拓也 (津田塾大学)

本発表は、Arii, Syrett and Goro (Submitted[1])の内容に基づき、日本語・英語を母語とする5歳児がMeasure Phrase (MP)を含む比較構文に対して与える意味解釈と、その解釈パターンが言語理論にもたらす知見に関して議論する。

成人話者は、(1)および(2)の下線部MPを「ビルと、その比較対象との高さの差を表す」として解釈する。このような構文を用いて実験を行ったところ、日・英語の5歳児は共に、MPを「ビルの高さの絶対値」として解釈する傾向が非常に強いことが明らかになった。日本語と英語は、比較形態素の有無や比較対象を表す句(than.../～より)に関する語順、更には上記「差の解釈/絶対値の解釈」の表し方などが異なっているにも関わらず、当該構文に関する5歳児の反応パターンは共通しており、しかもそれは大人とは違うものだった。

本発表はSawada and Grano (2011[2])の比較構文とMPに関する分析を採用して、幼児が母語の違いに関わらず同じ振る舞いをするのはなぜかを説明するために必要な仮説を提示し、普遍的・生得的な言語知識との関わりについて述べる。

- (1) このビルは、(あのタワーより)20メートル高い。
- (2) This building is 20 meters taller (than that tower).

[1] “Investigating the Form-Meaning Mapping in the Acquisition of English and Japanese Measure Phrase Comparatives,” *Submitted*. [2] “Scale Structure, Coersion, and the Interpretation of Measure Phrase in Japanese,” *NALS* 19.

F 室 (11月22日午後)

### 「修飾の統語と意味：特殊からの視点」

司会 菊地朗 (東北大学)

修飾構造の統語的・意味的特徴は、数々の理論的問題を提起しており、比較的古くから研究がすすめられてきているにもかかわらず、いま

だ細部に渡っては確定していると思われる分析はないのが現状である。また、言語のどの側面についても言えることではあるが、規則的な現象に並んで、一見するとanomalousなあるいは特殊と思われる現象も散見される。本シンポジウムを、形容詞などによる修飾(および叙述)関係を中心に(語構造も含めた)統語・意味の諸相をまとめ、それらの従来研究について確認するとともに、一見すると奇妙と思われる構造や、意味関係を中心に古くからの問題を新しい視点から捉えなおす試みを提案してみたい。

### 「名詞表現内部での叙述関係について」

講師 岸浩介(東北学院大学)

一般的に、名詞句の内部では修飾要素(形容詞)と被修飾要素(名詞)との間に修飾関係が成立する(e.g. beautiful flowers / the handsome boy)。しかしながら、英語の同格表現(e.g. the ripper Jack / Jack the ripper)のように、むしろその根底に叙述関係を持つように見えるものも存在する。本論では、このような表現が示す様々な特徴(cf. Keizer 2007)などを再考察し、より適切な統語分析の提示を試みる。特に、Moro (2000)やChomsky (2013)などで提案されている「対称的(symmetric)」な小節構造(i.e., {XP, YP})を用いた分析の妥当性を検証し、これらの表現がどのような統語構造から派生されるのか考察する。また、visible stars / stars visibleのような前位/後位用法の形容詞を含む事例との関連性についても考えたい。

[1] Chomsky, Noam (2013) “Problems of Projection,” *Lingua* 130, 33-49. [2] Keizer, Evelien (2007) *The English Noun Phrase*, Cambridge Univ. Press, Cambridge. [3] Moro, Andrea (2000) *Dynamic Antisymmetry*, MIT Press, Cambridge, MA.

### 「併合と括弧標示の逆説」

講師 北田伸一(東京理科大学)

本発表の目的は、語形成に見られる括弧標示の逆説(bracketing paradox)の現象を説明することである。分散形態論では根(R)と機能範疇(F)を仮定し、これらの語彙が併合(Merge)して語を形成する。併合は自由適用であるため、語形成では(1) R+F、(2) R+R、(3) F+Fの三つの併合

の可能性が生じる。これらのうち、(1)は通常の語を派生させるが、(2)は複合語を派生させる(Harley 2009)。本発表では、(3)が括弧標示の逆説の環境を派生させると主張する。

[1] Harley, Heidi (2009) “Compounding in Distributed Morphology,” in Lieber & Štekauer (eds.), *The Oxford Handbook of Compounding*, Oxford Univ. Press, Oxford, 129-144.

### 「比較標識と比較節の選択関係」

講師 島越郎(東北大学)

比較構文における比較標識moreとthan節との選択関係を捉える分析としては、than節をmoreの補部に基底生成し、文末へ移動させる外置分析(Bresnan 1973など)と、than節をmoreとは離れた位置に基底生成し、解釈規則により両者を関連づける基底生成分析(Jackendoff 1977など)が提案されてきた。また、これら二つの分析を融合する分析がBhatt and Pancheva (2004)により提案されている。この分析によると、moreが数量詞繰り上げ(QR)により文末に移動し、移動先のmoreにthan節が非循環的併合(Late Merge)される。本発表では、QRとLate Mergeに基づく分析の問題点を指摘し、代案として、moreの補部に発音されない代形proが生起し、proが文末のthan節に束縛されることによりmoreとthan節の選択関係が満たされることを提案する。

[1] Bresnan, Joan (1973) “The Syntax of Comparative Clause Construction in English,” *LI* 7, 275-343. [2] Jackendoff, Ray (1977) *X-bar Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA. [3] Bhatt, R. and R. Pancheva (2004) “Late Merger of Degree Clauses,” *LI* 35, 1-45.

### 「比較概念と分離AP構文」

講師 菊地朗(東北大学)

形容詞による名詞修飾は前置修飾と後置修飾のどちらかの形をとるのが通例であるが、a **similar car to mine**のように、形容詞が前置修飾をしているものの、その形容詞の補部(あるいは付加部)が名詞の後ろに生じる場合がある。この構文は分離AP構文(Escribano 2005)と呼ばれる。本発表ではこのような修飾が可能になる形容詞には意味的に比較の概念が含まれてい

ることを指摘し、機能範疇Degを内在的にもつ語彙類を仮定することによってこの構文の特徴の説明を試みる。また、判断基準を表す不定詞節の分布や日本語での本構文の可否、および形態論で指摘されている類似現象(並木 1987)の現れ方についても触れてみたい。

[1] Escribano, J. L. Gonzalez (2005) “Discontinuous APs in English,” *Linguistics* 43, 563-610. [2] 並木崇康 (1987) 「複合語における『副主要部』」, 『英語青年』1987年2月号

G室 (11月22日午後)

### 「構文変化と談話・情報構造—データと理論の融合を目指して—」

司会 柴崎礼士郎 (明治大学)

本シンポジウムの目的は二つある。一つは、異なる理論的立場から構文事例に迫り、変化・拡張をより良く捉えるための意見交換の場を提供することである。もう一つは、これまでの構文研究で十分に論じられてはいない発話・対話を通して創発される構文事例にも着目することである。具体的には、生成文法理論の立場から他動詞構文の拡張を史的に考察する発表、認知言語学の立場から懸垂分詞の構文化を分析する発表、そして、談話機能言語学の立場から共有構文の創発を論ずる発表である。構文事例により考察時期が異なるが、具体的な言語使用を分析するツールとして英語コーパスを用いる点は各発表に共通している。取り上げる事例によっては通言語的考察も進んでいるため、対照研究および通言語的研究の紹介と可能性を探る意味で他言語からの事例を引く場合もある。

### 「構文変化と意味情報」

講師 大沢ふよう (法政大学)

英語においては「他動詞化」が進み他動詞構文が拡大したことが指摘されている (Visser (1970[1])). 同時に「自動詞化」も起こったが動きとしては他動詞化のほうが強かった (中尾 (1972: 279[2]) 中尾・児馬 (1990[3])). 本発表は文法化の流れの1つとして、他動詞構文の拡張を生成文法の観点から分析する。拡張の要

因としては音韻的理由、形態的理由、またメタファーやメトニミーの要素を考慮する認知言語学的な分析 (Taylor (2003[4])) もある。現象的には他動詞が増えたからと捉えられるが、実は他動詞構文という構文が拡張したのだ、と提案する。そして構文の拡張を可能にしているものは何かを提案する。動詞が取る項構造のメカニズムが意味的制約から自由になり、動詞とその目的語・内項との間に意味的な関係が要求されなくなったとき「他動詞的」でない他動詞構文の成立が可能となる。それまでは可能でなかった種々の構文の成立も証拠として他動詞構文の拡張の要因を理論的に分析する。

[1] *An Historical Syntax of the English Language I* [2] 『英語史II』 [3] 『歴史的にさぐる現代の英文法』 [4] *Linguistic Categorization*

### 「懸垂分詞の構文化」

講師 早瀬尚子 (大阪大学)

文法化研究が依拠する「語彙から文法機能へ」「自由から拘束へ」の「一方方向性仮説」の反例とおぼしき現象が指摘される中、近年「構文化」という概念で、これまでの言語変化現象を包括的に捉える方向が提唱されている (Traugott and Trousdale (2013[1]))など。この考え方のもとでは、意味と形式のペアが創りあげられる各々の言語変化プロセスをそれぞれ個別的なものと考え、ため、「仮説」に反する現象をも問題なく受け入れる。

この視点から、本発表では英語における主語不一致の懸垂分詞構文 (Turning the corner, the ticket office is on the left.) の成立について、およびその懸垂分詞由来の複数の表現がそれぞれに対人関係的な機能へ向かうことについて、「構文化」という観点から検討する。いずれの変化においても重要なファクターは、構文内的な動機づけに加え、言語外的な生起環境 (特に対話環境) にあり、そこから変化の方向性が決まることを見る。また同様な変化現象 (の有無) について、他言語との比較も行う。

[1] *Constructionalization and Language Change*, OUP.

### 「発話周辺と共有構文の創発」

講師 柴崎礼士郎 (明治大学)

共有構文とは語あるいは句を共有する二つの節から成る構文のことである (*OED*, s.v., *apokoinou*, *apo-koinou*)。Meritt (1967[1])によれば共有構文は古くから存在し、古・中英語、ゴート語、古ノルド語等、特にゲルマン語からの事例が多数紹介されている。本発表では近年の共有構文事例を取り上げる。つまり、発話導入時(左周辺)に用いられるthe X is (that), ...と発話要約時(右周辺)に用いられるthat's (not) the Xの共有構文化(i.e. that's the X is (that), ...)に注目し、共有構文の創発を談話機能言語学の視点から考察する。融合前の構文には否定辞が含まれる場合が多いが(that's not the X)、融合後には否定辞は消失する場合が殆どである(i.e. that's the X is (that), ...)。情報連鎖の変化が共有構文化と関係している証拠である(cf. Ross-Hagebaum (2005 [2])). Jespersenによる接触節(contact clauses)、談話・会話研究分野で注目される旋回構文(pivot constructionsの試訳)、言語習得からの事例報告も含めつつ、共有構文を総合的に考察する。

[1] *The Construction ἀπό κοινοῦ in the Germanic Languages*, AMS Press, Inc. [2] "The That's X Is Y Construction as An Information-Structure Amalgam," *BLS* 30.